

特別講演会 (Kazuo Yamaguchi 教授)

2001年3月12日(月)午後1時30分～3時、国立社会保障・人口問題研究所、第4会議室において、シカゴ大学教授 Kazuo Yamaguchi (山口一男) 氏による「イベントヒストリーモデルの出生力分析への応用 (Application of Event History Model to Fertility Analysis)」と題された特別講演会が行われた。研究所内外から多数の参加があった。山口氏は計量社会学(数理社会学)の専門家であり、結婚、家族、労働等に関する人口学的業績も多い。今回の講演では、事象歴分析手法の一般的な枠組みについて紹介した後、氏が開発された mover-stayer model の一つについて実例によって紹介した。事象のタイミングと事象の最終的な非生起確率(初婚を例にすれば、初婚年齢分布と生涯未婚率)の双方に対する回帰分析を同時に行うものである。人口統計学の対象には初婚以外にも、再婚、高順位の出生のように、生涯における非生起確率の高い事象が多く、過程途上のコーホートでは事象タイミングの変化と非生起確率の変化を分離することが困難である。氏はこのための手法を開発したが、今回共変量の情報を用い、人口の不均質性をコントロールすることで分離をより正確に行える可能性があることを示した。なお、氏からこれを行うプログラムの提供があった(情報調査分析部に保管されている)。

(金子隆一記)

日本人口学会東日本地域部会2000年度第1回研究報告会

日本人口学会東日本地域部会の2000年度第1回研究報告会は2001年1月13日、国立社会保障・人口問題研究所で開催された。報告は以下の2題である。

「出生率への近成要因の影響：年齢依存の両性シミュレーションモデルの構築と適用」

萩原 潤 (東京大学)

「高齢者の居住状態の将来予測」

鈴木 透 (国立社会保障・人口問題研究所)

第一報告は出生力に対する近成要因の影響を評価・分析するための確率論的シミュレーション・モデルの構築に関するもので、適用例としてバングラデシュにおける DHS データを用いた分析が紹介された。第二報告は65歳以上男女の居住状態を2020年まで推計したもので、独居、夫婦のみ、子との同居、施設といった居住状態分布の変化が人口学的要因と関連づけて予測された。座長を務めた大塚柳太郎担当理事の司会のもとに、活発な討論が行われた。

(鈴木 透記)

日本人口学会東日本地域部会2000年度第2回研究報告会

日本人口学会東日本地域部会の2000年度第2回研究報告会が2001年3月24日、東北学院同窓会館(仙台市)において開催された。報告は以下の3題である。

「日本の国内人口移動パターンの長期変動 - 1960年代以前を中心として」

阿部 隆 (宮城学院女子大学)

「わが国主要島嶼の人口特性 - 因子分析による考察」

羽田野正隆 (北海道大学)

「東京および大阪大都市圏における少子高齢化の地域差 - GIS を用いた分析」